

乳がん高度検診・治療センター

NEW-す No.123

両側乳がんについて

乳腺は2個ある臓器ですので、両側の乳腺にがんができることがあり、これを両側乳がんと呼びます。近年、診断技術の進歩もあって最初に見つかった乳がんとは反対側の乳腺に、同時に、あるいは何年かのちにがんが見つかる機会が増えています。

同時性両側と異時性両側の乳がん

両側乳がんには、両側が同時に見つかる場合と、片側の乳がん治療後に反対側の乳がんが見つかる場合とがあり、それぞれ同時性あるいは異時性両側乳がんと呼ばれます。両者合わせた両側乳がんは全乳がんの約10%を占めますので意外と高い頻度と思われるかもしれませんが、近年、片側だけの乳がんとして治療前の精査中にMRI検査などで偶然反対側に小さながんが見つかる例も増えています。

異時性両側でもほとんどが転移ではなく新たながん

両側乳がんて一方が他方からの転移のことは極めてまれで、ほとんどが別々に発生したがんです。異時性両側乳がんであっても、それは前回の乳がんとは無関係に発生した乳がんのことがほとんどで、そのタイプや進行具合に応じた適切な治療により完治が望めます。それゆえに片方だけの乳がんの患者さんであっても、対側乳房のマンモグラフィやエコー検査が定期的に必要となります。

移転性乳がん・卵巣がんと両側乳がん

両側乳がんと診断された患者さんでは遺伝性乳がん卵巣がん症候群の原因遺伝子であるBRCA1あるいはBRCA2遺伝子に変異(異常)を認める率が片側の乳がんに比べて高いですので、手術方法や治療方針の決定に先立ち調べるのが望ましいでしょう。

同時性両側乳がんの治療

同時性両側乳がんの手術は、左右それぞれのがんの広がりや患者さんの希望に応じて乳房温存療法か乳房全切除術かが決定されます。ただ、術前にBRCA遺伝子検査を行って変異があれば両側とも乳房全切除術が推奨されます。乳房全切除術を行う場合は、進行例を除いて一次乳房再建の選択肢があります。

薬物療法は両側だからといってより強力になるわけではありません。より進行した側あるいは悪性度の高い方の乳がんを焦点を合わせて治療を行います。双方で性格が異なるがんの場合には、より多種類の薬物療法が必要になる可能性があります。

両側乳がん術後の採血や点滴は？

ひと昔前まで乳がん術後、患側からの採血や点滴は避けるべきだと考えられていました。しかしこれには確たる根拠(エビデンス)はなく、今ではさほど厳しく言われなくなり、「患者さんのための乳がん診療ガイドライン(2023年版)」

でも「一定の見解はない」とされ、柔軟な対応が求められます。特に腋窩の手術がセンチネルリンパ節生検の場合はほとんど問題ありません。それでも片側の乳がんであれば原則として反対側の腕から採血や点滴を行っています。

両側乳がん術後の採血や点滴をどちら側の腕で行うかは、両側の腋窩手術の内容などを考慮して担当医や看護師の指示に従ってください。